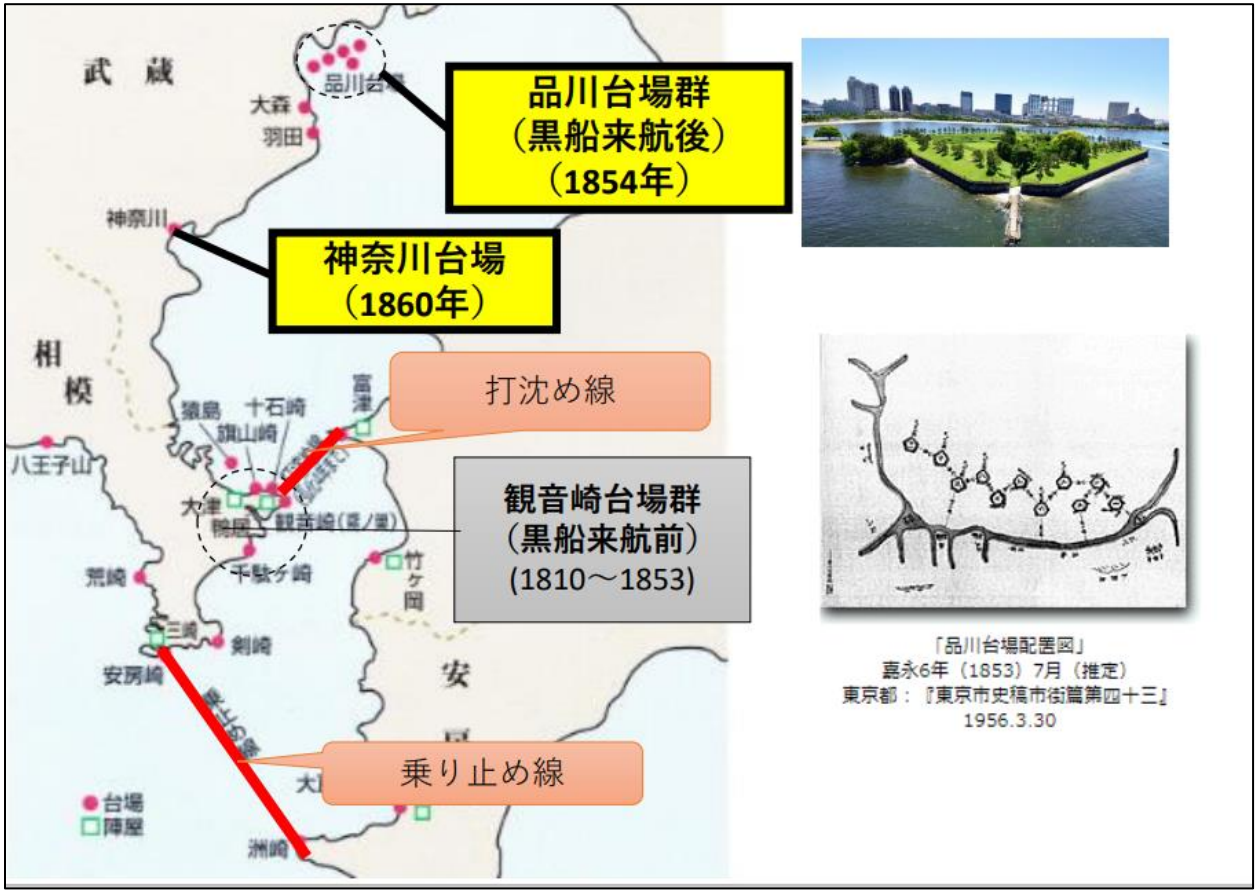
黒船来航前後における江戸湾の防備



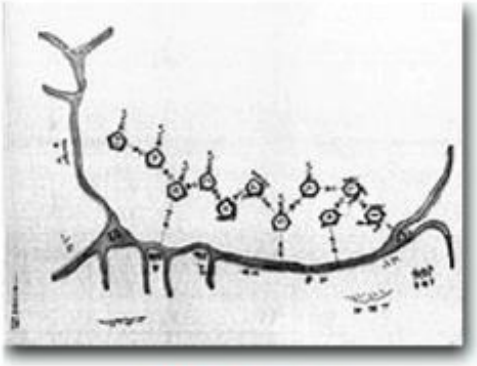
「品川台場配置図」
喜永6年（1853）7月（推定）
東京都：『東京市史稿市街篇第四十三』
1956.3.30

黒船が来航する前から、幕府は江戸の防備の重要性に気づき、観音崎に台場を造り始めます。黒船来航後は品川にも台場を造ります。しかし陸上の台場は限られた拠点を守るには適していますが、千変万化する情勢には対応できません。やはり柔軟に動き回れる移動砲台（軍艦）の重要性に幕府は気付いたのでしょう。

品川沖5個の台場

◆ ペリー来航翌年に完成した5 個の台場 1854

　ペリー来航後、幕府から再び江戸湾海防を命じられた江川太郎左衛門は、観音崎～富津岬の防護線とともに江戸の最後の護りとして品川台場の建設を提案しました。これに基づき、江戸湾最初の人工島が築かれることとなったのです。ただし、水深は1.9～3.5mの浅い海中でした。台場建設は、江川の設計・施工監督のもと、わずか2年足らずの突貫工事で行われ、安政1年（1854）、5個の台場が完成しました。



「品川台場配置図」
嘉永6年（1853）7月（推定）
東京都：『東京市史稿市街篇第四十三』
1956.3.30

◆ 現存する2 個の台場

　品川台場は、結局、実用に供されることなく終わりましたが、3番台場・6番台場が現存し、東京臨海副都心のウオーターフロントの一部として都民に親しまれています。3個の台場の撤去の際は、頑健な造りのため、大変な苦労をしました。幕末当時の優れた建設技術を物語っています。

異国船の脅威と江戸湾防備　各藩の体制

●1808年（文化5年）、イギリスの軍艦フェートン号がオランダ国旗を掲げて長崎に入港、オランダ商館員を捉えて食料などを強奪する事件が発生した。いわゆるフェートン号事件である。幕府はこの事件に衝撃を受け、江戸湾防備体制を再検討することになった。

●1810年（文化7年）幕府はそれまでの沿岸諸藩中心の防備を改めて、有力藩による江戸湾防備体制をとることにした。

相模沿岸は会津藩が、上総・安房沿岸は白河藩が担当する事となり、川越藩は一時海防から離れることになった。

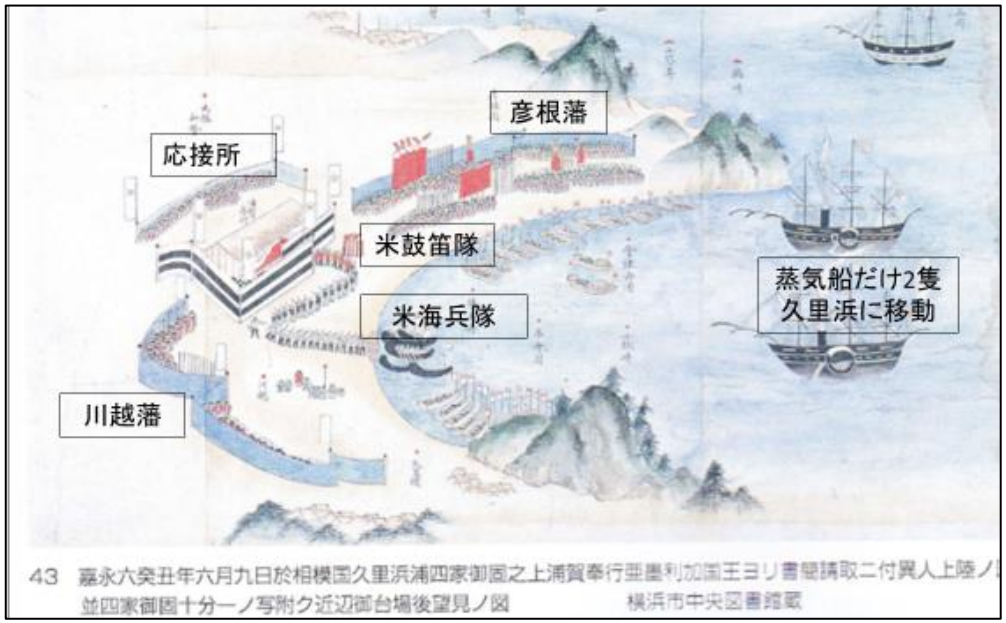
●1820年（文政3年）には相模沿岸の警備を担当していた会津藩が解任され替わって浦賀奉行が担当する事になる。その際、非常時には川越藩と小田原藩が助役として軍勢を派遣することになった。

●1825年（文政8年）幕府は「異国船打ち払い令」を発令したが、アヘン戦争のニュースが伝えられると1842年（天保13年）7月にはそれを撤回し、外国船に。薪・水の給与を許す緩和策を示した。それとともに江戸湾防備の強化策を決め、同年8月には川越藩に相模沿岸を。忍藩に房総沿岸の警備を命じた。この江戸湾防備のに2藩体制は1847年（弘化4年）まで続くことになる。

●1846年（弘化3年）米東インド艦隊司令官ビッドルは軍艦2隻を率いて浦賀にやってくる。米国は公式に開国を要求するが、幕府に拒否され退去する。このことは幕府や警備諸藩に海防強化を強く認識させることになる。

●1847年（弘化4年）にそれまでのに2藩に加えて彦根藩と会津藩を加えて4藩体制となる。そのため相模湾の沿岸警備は川越藩と彦根藩が分担することになった。

●1853年（寛永６年）７月１４日久里浜にて、日本に初上陸するペリー艦隊の一行



ペリー艦隊久里浜上陸